

「酒井恵尊師記功碑」について

整理番号	石川〇三	題額	酒井恵尊師記功碑	題額揮毫	—	碑記撰文	田保橋四郎平	碑記揮毫	—
------	------	----	----------	------	---	------	--------	------	---

鐫刻	—	撰文建碑年	一九二三・大正一二	住所	七尾市沢野町	場所	中村隧道横	備考	
----	---	-------	-----------	----	--------	----	-------	----	--

一. はじめに

本石碑は、沢野村から殿村へ抜けるトンネル造りに力のあった、真証寺住職酒井恵尊師の功績を伝えるために立てられたものである。中村隧道の沢野村側の洞外に立つ。

○写真1 石碑正面



○写真2 立地



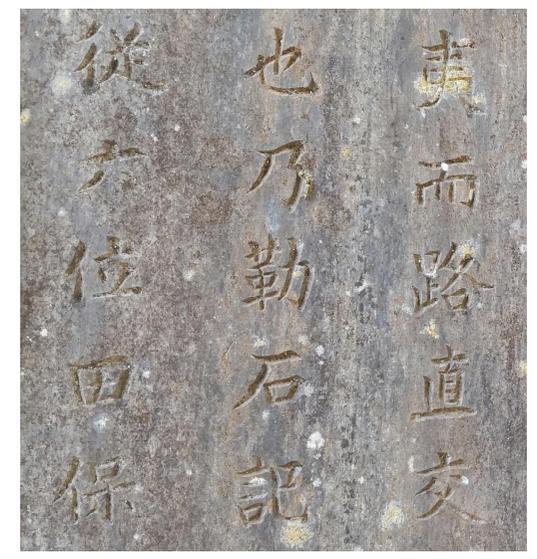
酒井惠尊師記功碑

■ 翻刻
◎ 題額 (篆書体)

二. 翻刻並に訳注



○写真3 題額



○写真4 「碑記」部分

◎碑記（楷書体）

自中村抵殿邑路越小山徑隘阪峻崎嶇羊腸來往
殊艱眞證寺惠尊師夙憂之率先唱開鑿之議奔走
從事邨民應之有投資者有致力者而得有志十有
七人同心戮力洞開山脚作隧道大正十年六月起
工數月而告成今也阪夷而路直交通至便鄉人長
受其利者實由師之力也乃勒石記功以圖不朽云
大正十二年九月 從六位田保橋四郎平識

●異体字等

○眞 眞。 ○致 致。 ○圖 圖。

■訳注

◎題額

酒井惠尊師記功碑

◎碑記

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

自中村抵殿邑、路越小山。

徑隘阪峻、崎嶇羊腸、來往殊艱。

眞證寺惠尊師、夙憂之。

率先唱開鑿之議、奔走從事。

邨民應之、有投資者、有致力者、而得有志十有七人。

同心戮力、洞開山脚、作隧道。

大正十年六月起工、數月而告成。

今也、阪夷而路直、交通至便。

鄉人長受其利者、實由師之力也。

乃勒石記功、以圖不朽云。

大正十二年九月 從六位田保橋四郎平識

●訓訳

◎題額

酒井惠尊師記功の碑。

◎碑記

中村より殿邑に抵る、路 小山を越ゆ。

こみち 徑は隘く阪は峻く、崎嶇羊腸として、來往殊に艱し。
眞證寺惠尊師、夙に之を憂ふ。
率先して開鑿の議を唱へ、奔走從事す。
邨民之に應じ、資を投ずる者有り、力を致す者有りて、有志十有七人を得。
心を同じくして力を戮はせ、洞 山脚に開け、隧道を作す。
大正十年六月 工を起こし、數月にして成るを告ぐ。
今や、阪は夷にして路は直に、交通至つて便なり。
郷人長く其の利を受くるは、實に師の力に由るなり。
乃ち石に勒して功を記し、以て不朽を圖ると云ふ。
大正十二年九月、従六位田保橋四郎平 識す。

●人物

○惠尊師 眞証寺第十八世住職。
○田保橋四郎平 慶応二（一八六六）年から。石川県三崎村（現、珠洲市）の人。函館で勤務したらしいが、のち、地元旧制七尾中学校で漢文の教鞭を執る。皓堂、また明卿と号し、漢詩文も数多く作成した。本碑文撰述は、五十八歳のときで、七尾中学校は退職していたか。漢詩文集に「梅花白屋詩文」（田保橋潔編、私家版、京城、一九四三）があるが、同書の例言に、文章は二百篇余り作つたが、この文集では晩年に作つた四十篇を収録した、とあり、本碑文は収録されていない。四郎平の没年は不詳だが、例言によれば、昭和十七年段階で、存命（七十七歳）であった。詩文集編者の田保橋潔（一八九七〜一九四五）は、四郎平の息子。京城帝国大学教授となり、日本近代外交史、朝鮮近代史を専門とした。

●注

- 中村 現七尾市沢野町字中村。沢野から七尾の町へ出る道は、殿村を経由した。現在でも、「沢野」のバス亭を出発してトンネルをくぐると「殿」のバス亭がある。
- 殿邑 現、七尾市殿町。
- 崎嶇 山道が険しいさま。陶淵明「帰去来辞」に「既窈窕以尋壑、亦崎嶇而經丘（やがてうねうねと曲がりくねった奥深い谷を尋ね、また険しい山道を進んで丘を過ぎる）」とある。
- 眞證寺 浄土真宗大谷派の寺院。
- 邨民 村民。沢野村の村民であろう。
- 投資 資金を提供する。
- 致力 力を尽くす。
- 大正十年 西暦一九二一年。
- 告成 事業が完成する。
- 夷 平坦。
- 路 みち。前句の徑との対比。
- 勒石 石に文字を刻むこと。
- 不朽 永遠に朽ちずに伝わること。
- 大正十二年 西暦一九二三年。

●口語訳（章立てと小見出しは訳者が便宜的につけた）

◎題額

酒井惠尊師の功績を記録する石碑。

◎碑記

【沢野の交通の不便さ】

七尾の沢野村中村より殿村に至るには、小さな山を越えの道しかなかった。

その道は狭い小道で、坂は急峻、羊の腸のようになうねと曲がっており、往来するの
に大変難儀であった。

【惠尊和尚による隧道開鑿發議と村民の賛同協力】

沢野村の真証寺の住職である惠尊師は、早くからこのことを憂いていた。

そこで先頭に立って隧道開鑿を提唱し、その実現へ向けて奔走した。

沢野村の村民たちもこれに賛同して応じ、資金を提供するものや事業の実現に力を尽く
すものが出てきて、十七人の有志者を得た。

みな心をひとつにして力を合わせた結果、洞穴が小山の麓に開通し、隧道をなしたので
あった。

【隧道の完成】

大正十年六月に工事を始め、数ヶ月で完成した。

今や、坂道は平坦に、道もまっすぐになり、交通がとても便利になった。

【惠尊師の功績と顕彰】

村人達が、未永くこの隧道の恩恵を受けられるのも、ひとえにそれを先唱し実現へ向け
て奔走した惠尊師の力によるといえる。

そこで師の功績を記録してそれを石碑に刻み、この地に立てて、永遠に朽ちずに伝える
ことを図ったのである。

【記事】

大正十二年九月、従六位田保橋四郎平が文章を書いた。

三、主な参考資料

①紹介と翻刻

・七尾の碑編集委員会『七尾の碑』七尾市立図書館友の会編、一九九九。

②田保橋四郎平関連

・「物語七尾高（49）教師列伝②」「北陸中日新聞」一九八一・四・一五。

・『七尾高校百年史』一九九九

*本稿作成にあたり石川県立七尾高等学校校長樋上哲也氏・七尾市立図書館から貴重な資
料の提供を受けた。記して御礼としたい。

以上

二〇二四年十二月 薄井俊二訳す